

## 多層的言語ゲームと多層的コミットメント

藤原聖子氏「宗教哲学におけるウィトゲンシュタインの影響と可能性」に答えて

星 川 啓 慈 (図書館情報大学)

はじめに

本誌において、藤原聖子氏(以下「氏」と略記)が、拙著『ウィトゲンシュタインと宗教哲学——言語・宗教・コミットメント』、およびA・キートリー著『ウィトゲンシュタイン・文法・神』(拙訳)を俎上にのせ、秀逸な批判的論評を展開して下さった。多岐にわたる批判の論点はどれも射たものばかりで、多に学ばせていただいた。反論めいたものを書くつもりはない。氏の批判と、私が拙著で書き足らなかったこととを絡めて議論を展開し、疑問の一部に答えることを本稿の目的としたい。また、両著作を読んでいない読者、この分野の議論に不慣れな読者にも議論が理解されるように、分かり易いかたちで話を進める。

氏が批判の対象にしている問題は数多く、かつ微妙なものだが、ここでは、もっとも重要と思われる「コミットメント」と「言語ゲーム」にかかわる問題のみに、考察を限定する。氏のことばを借りれば、コミットメントは「最大の鍵概念といえる」ものであるが、これ「自体についてはほとんど語られていない」(135)。

議論を明確にするため、私の視点から氏の論点を以下で要約する(上のように、引用文のあとに( )を用いて引用箇所をページを示す)。いきおい解釈が入ることを、ご容赦願いたい。

### 1. 私の基本的立場

まず、氏が言うように、私には「護教的関心はない」(133)。そうかといって、「何よりもウィトゲンシュタインその人に〔忠実に〕依拠する」(133)のでもない。たしかに、ウィトゲンシュタインの思索に大幅に依存し、これを応用している。けれども最終的には、私の関心とつながる範囲でそれに依拠している。それゆえ、ウィトゲンシュタイン哲学の忠実な解釈からは、矛盾が指摘されることもあろう(e.g.138)。

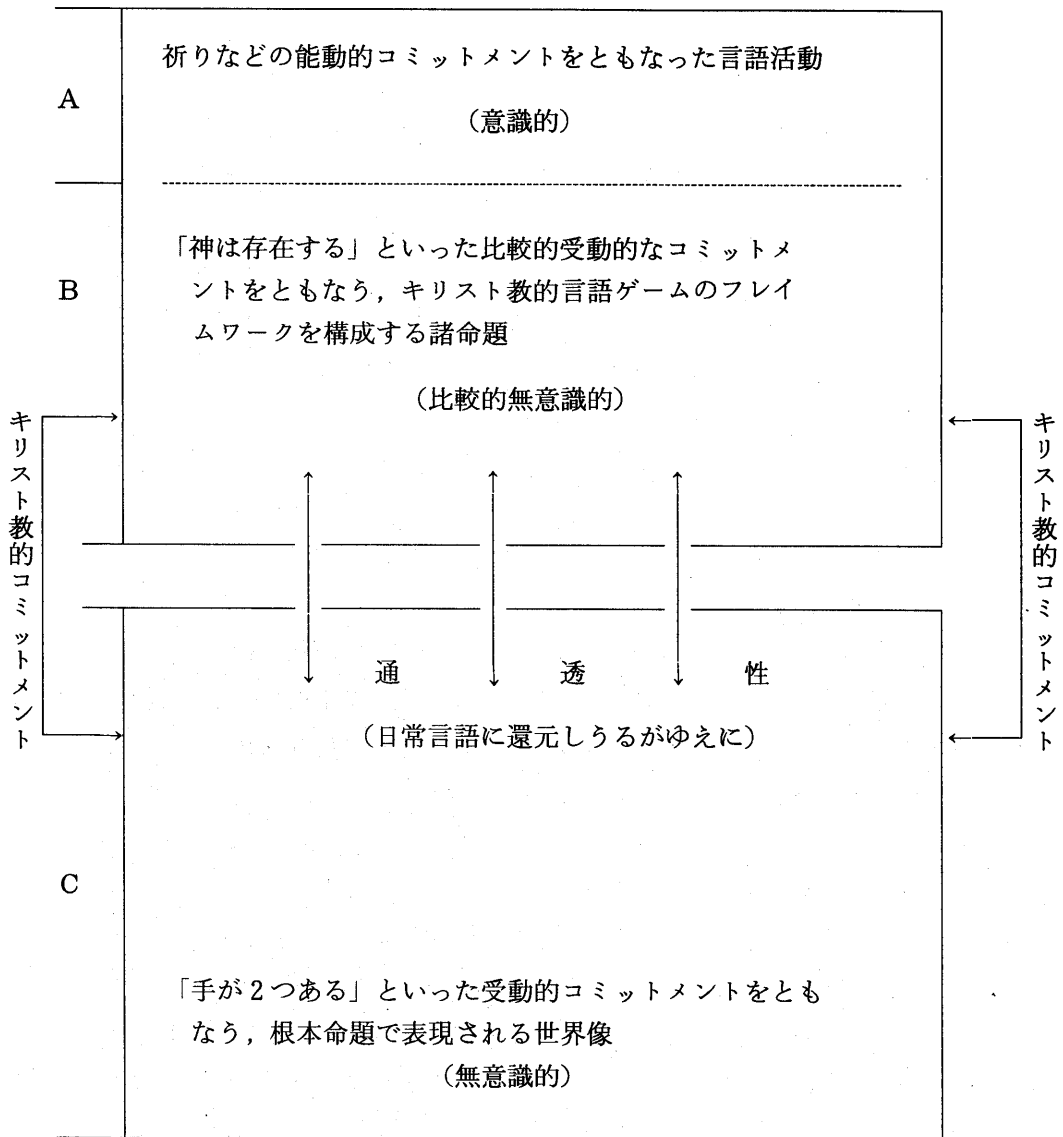
『ウィトゲンシュタインと宗教哲学』でめざしたところは、氏も述べているように「キリスト教という言語ゲームとこれ以外の言語ゲームとの<通約可能性>〔commensurability〕<対話の可能性>を保持しながらも、宗教言語の独自性を温存すること」にある

(129)。これにより、現代における宗教の多元的状况——ただし、同一言語が話されていることを前提とする——のなかで、さまざまな宗教を信じている人々はそれぞれの宗教の独自性・ユニークさを保持しながらも、他の宗教を信じている人々(また宗教を持たない人々)と対話できる可能性を模索することを狙っている。それゆえ、日常言語への還元にこだわるのである。

## 2. 言語ゲームについて

ウィトゲンシュタインのいう「言語ゲーム」をいかに捉えるかは、研究者のあいだでも異論がある。しかし、私の議論に関連する言語ゲームの捉え方は、次の2つである。まず、(a) 個々バラバラの言語使用・活動を言語ゲームとして捉えることが考えられる。これについては、ウィトゲンシュタイン自身も、命令する、対象を記述する、出来事を報告する、仮説を立てて検証する、物語を創作して読む、劇を演じる、歌曲をうたう、謎を解く、冗談を言う、乞う、感謝する、挨拶する、祈るなど、言語を伴うおおよそあらゆる活動のことを言語ゲームとみなしている<sup>(1)</sup>。これに対して、(b) 言語ゲームをひとつの閉じた体系もつものとして捉えることも可能である。これは私が強調した立場であり、ウィトゲンシュタインが、たとえば次のように述べていることに基づく：「体系とは論証の出発点であるよりも、論証の生きる場である」<sup>(2)</sup>、「個々の知識はわれわれが認める価値をこの体系のなかでのみ有することができる」<sup>(3)</sup>。ここから私は「言語ゲームは、恣意的な規則によって支配されており、ひとつの体系を構成している」と解釈し、この考え方をキリスト教に応用して、ウィトゲンシュタイン・ニアンたちの立場はこれであるとした。彼らを執拗に批判するK・ニールセンも、大筋ではこのように、ウィトゲンシュタイン・フィデイズムを把握している<sup>(4)</sup>。

拙著では(b)の立場を強く打ち出しすぎた嫌いがある。もしくは、(a)と(b)というタイプの異なる言語ゲームを充分区別していなかった。私は言語ゲームの体系性を重要視したけれども、体系だった言語ゲームを構成するのは、やはり個々バラバラの言語活動である。マタイ福音書にある「主の祈り」を例にとったが、たとえば、これの最後のことは「わたしたちを誘惑に陥らせず、悪から救ってください」というものである。これは個々バラバラの言語ゲームの例として考えられる。こうした要素が集まって、「主の祈り」として1つの体系を構成する。さらには、信者同志の対話や神学的議論などでみられるもろもろの言語活動がおおきなキリスト教的言語ゲームを構成する、と考えられよう。図でいえば、AおよびBのレベルにある言語ゲーム・言語活動も個々バラバラの性格をもつ。しかし、これらは全体として、1つの大きな体系を形成していると解釈できる。



- ・非キリスト教信者の言語ゲーム=C
- ・キリスト教信者の言語ゲーム=C+(A+B)
- ・キリスト教的コミットメント=Cと(A+B)とを結合するもの
- ・コミットメントの能動性および意識化は上層にいくほど強くなる

### 3. コミットメントについて

私は、キリスト教に特徴的な祈りを例として挙げながら、宗教言語を語ることは、信念・感謝・願望・意志・態度などを表明・表現するという「自己が関与する(コミットする)行為」であり、また神に対する信者の「コミットメントの表明」であるとした(131)。

ここでは、「言葉は神に対して自己が関与する（コミットする）行為」、あるいは礼拝などの行為の都度に「自分自身をあるもの（神）にコミットさせる」という脈絡で、コミットメントを「能動的なもの」として扱っている(133, 上点引用者)。しかしこの一方で、私は「ある言語ゲームの内部に入るために必要な・・・コミットメントの受動性」を強調している(133, 上点引用者)。後者は「キリスト教の言語ゲームをプレイできる場を構成する」(135)もの、「かまえ=フレームワークを構成する」(137)のものであり、前者は「言語ゲーム成立後に登場するいわば異なる位層におけるコミットメント」(133)である。氏が指摘したように、「能動的コミットメント」と「受動的コミットメント」という「異なる位層におけるコミットメント」の区別を明確にすべきであった。

重複する部分もあるが、以上のようなことを、図を使用しながら説明していきたい。

#### 4. 多層的言語ゲームと多層的コミットメント

##### 4・1. 多層的言語ゲームについて

まず、「手が2つある」といった根本命題で表現される世界像がある(C)。これは無意識的なものであり、日常言語で記述しうる。そして、人間が生きていく上で根本的な世界像を構成するものである。ウィトゲンシュタインのことばを借りれば、「思考の基盤」「行動の基盤」「信念の基盤」「確信の根底」「あらゆる探究とすべての主張を支える基体(Substrat)」である<sup>(5)</sup>。非キリスト教信者の言語ゲームは、キリスト教との対比の上で考えれば、これで完結する。キリスト教信者の場合には、この上層に、「神は存在する」「神は私たちを愛してくださる」といった、比較的受動的なキリスト教的言語ゲームのフレームを構成する諸命題がくる(B)。これは、キリスト教的言語ゲームのフレームを構成するがゆえに、信者の意識においてもそれほど強烈な意識を伴っていない、と想像できる。さらにこの上層に、典型的には祈りにに見られるような、信念・感謝・願望・意志・態度などを表明・表現するときにプレイされる言語ゲームがくる(A)。これはきわめて意識的なもので、能動的コミットメントを伴う。宗教的なことばで表現されるものは、一応日常言語で説明がつく(日常言語に還元しうる)と思われるから、Cと(A+B)の間には通透性があると考えられる。それゆえ、異なる宗教を奉じる人々のあいだでも、また有神論者と無神論者とのあいだでも、概念的コミュニケーションが成立することになる。

##### 4・2. 多層的コミットメントについて

Cと(A+B)とを結合するものが、キリスト教的コミットメントである。これはキリスト教的言語ゲームを成立させるもの、これを他の言語ゲームから区別させるものである。このキリスト教的コミットメントをするかしないかが、キリスト教信者か否かを決定するポイントとなる。氏は「非信者が信者のフレームワークを構成すること、即ち言語ゲーム

をトータルに模倣することも可能だとすることにはならないか。信者になるために信者と同じ宗教生活をマスターしたがまだ入信の決心がつかない非信者が例として考えられる」(137)と、すこし疑念を示しているけれども、そのときの「模倣」はキリスト教的コミットメントに裏打ちされていないから、信者の営む言語ゲームとは異質だと考えたい。

キリスト教的言語ゲームと日常的言語ゲームを考えたように、このコミットメントにもいま見たキリスト教的なもの、日常的なものが考えられる。前者については上記のとおりだが、Cの層に位置する後者は「無意識のしたがい〔無意識のコミットメント〕」(136 *et passim*)、「受動的」コミットメントであり、生きていくうえでこれを意識することは殆どない。また、コミットメントの度合いについて言えば、Bの層にある、キリスト教のフレームを構成する命題にたいするコミットメントは、Cの層にあるものと比べれば、より能動的・意識的なものだと言える——よほど敬虔なキリスト教信者の場合、Bの層にあるコミットメントは、Cの層にあるものと同じく、意識にのぼってこないかも知れないが。Aの層にあるコミットメントは、かなり能動的・意識的なものである。信念・感謝・願望・意志・態度などを表明・表現することは、能動的・意識的な行為だといえよう。

#### 4・3・1つの問題

さて、ここで1つの問題がもちあがる。私はウィトゲンシュタインによってCの層でなされた議論をBの層に應用したが、この應用は妥当か否かという問題である。

ウィトゲンシュタインがいう「疑いを免れた」根本的な命題についての議論を宗教の場合に應用することは、私のみならず、彼の弟子・友人でもある哲学者N・マルコムも行っている<sup>(6)</sup>。しかし、氏が指摘するように、「実際のキリスト教史の中で、一般の信者もまた、神義論的な問いを持ち続けたことはどう解釈するのだろうか」(140)という疑問が出てくるもの当然である。氏によれば、「<2つ手があると信じる>とはいわないが<神は存在すると私は信じる>という信者の言明は、このような表現をもつ宗教の言語ゲームは、外部の存在、疑いの可能性を意識したものになっていることを示している」(140)。2つの手があることは疑いなく受け入れられても、神の存在はなんらの疑いもなく受け入れられるとは限らない。だとすれば、「2つ手がある」といった「事実の認知」(134)を示す命題から導き出された考察結果を、そのまま「神は存在する」といったキリスト教的命題に應用することは、たしかに問題である。しかし、この脈絡で私がウィトゲンシュタインの洞察——根本的諸命題で表現されることがらが、われわれの「世界像」を構成する、すべての人間の活動はこの世界像によって支えられている——を利用したのは、キリスト教信仰が営まれる「場」「フレームワーク」を構成するのは、キリスト教の基本的・中心的命題であることを述べるためである。力点はどこまでも、「場の構成」「フレームワークの構成」にある。

こう語っただけでは、問題は片づかないかも知れない。というのは、Cの層での議論を(A+B)の層に応用しておきながらも、あくまでもCを(A+B)よりも深層にあるものと、私は解しているからである。キリスト教信者からみれば、「私には2本の腕がある」といった事実認知的な根本命題で言い表されることがらは、「神は存在する」「神はわれわれを愛してくださる」といった神についての言明と比較すれば、取るに足らないことかも知れない。しかし、実際問題として信仰を捨て去る者のことを考えてみれば、彼らはたとえ神にかんする信念命題を信奉することを放棄しても、根本命題で表現される信念命題を信じることを放棄することはないという、動かすことのできない事実がある。それゆえ私は、根本命題で記述される世界像がキリスト教的言語ゲームよりも深層に位置する、と考える。さらに、くり返しになるが、拙著の立論ではこの層に依拠してはじめて、対話や通約可能性が生まれることも、その理由である。

以上の議論を念頭において、次に、氏によって提起された疑問を検討したい。

#### 5. 藤原氏の批判と、それにたいする応答

「様々なコミットメント間に差異を作り出すものは、コミットメント自体を存在論的・認識論的にいかに規定するかによって必然的に左右される」(135-6)と考える氏が提起する疑問(135-8)を拾いあげてみよう。実際には、氏の疑問は2つのカテゴリーとその下位に位置するサブカテゴリーとに分類されているが、この枠組みをはずしたかたちで紹介する：

- (a) コミットメントは宗教の言語ゲームに限定されるのか(135)。
- (b) 様々な言語ゲームにおけるコミットメントは同一か否か(135)。
- (c) コミットメントはいかなる存在性格をもつのか(135)。[星川のことばからは] 宗教言語に対する概念上の理解+ $\alpha$ =信者による理解( $\alpha$ ：「意味」, +：コミットメント)という図式が引き出される。概念的理解に既に意味があるのなら、 $\alpha$ の「意味」は字義どおりの「意味」ではなく、信者の生活に決定的な重要性を持つというような「意義」に近いものであり、また信者特有の感情や態度も $\alpha$ の1つ、あるいは $\alpha$ に随伴される(136)。
- (d) 理解をこのように2段階に分ける限り、言語ゲームの内外を別つ指標としては、最終的には「重要性(「意味」)を認める」「受け入れる」と表現されたものとしてのコミットメントのみが残る(137)。

これらの疑問にたいして、以下のように応答したい。

(a) にたいする応答は「否」である。コミットメントは宗教の言語ゲームに限定されない。科学や芸術の言語ゲームにもコミットメントがはたらいっている。しかし、氏も述べているように、「コミットメントが全ての言語ゲームの通約不可能な独自の部分を守ると

ということが宗教にも該当するため、それ自体が宗教固有ではないにせよ、コミットメントは宗教の独自性を温存するという目的にはなお応えている」(135)とは言えよう。コミットメントには、宗教的なもの・芸術的なもの・科学的なものなど、多種多様なものが考えられる。宗教・科学・芸術などを独自のなもの・ユニークなものとするという意味では、種々のコミットメントには「共通性」がある。こうした共通性があったとしても、それらのコミットメントによって、宗教・芸術・科学的などはそれぞれの独自性・ユニークさを獲得できる、と考えて不都合はなからう。

(b)は(a)と表裏一体の関係にあり、かつ微妙であるが、これにたいする応答は、一応「否」とする。様々な言語ゲームにおけるコミットメントは同一ではない。氏は「宗教の言語ゲーム1つにしても、伝統的な宗教学概念でのチャーチ型とセクト型では、ゲームへの加わりかた(いつコミットメントが生じるか)や選択の可能性の問題が異なると考えられる」と述べ、「著者がイメージしているのはどちらの宗教の型なのか」と問うている(8)。この問題については他日を期したいが、ここでは「セクト型に近いものをイメージしている」と答えておく。そして、日常的言語ゲームからキリスト教的言語ゲームを異質なものとさせるのは、キリスト教的コミットメントであるし、キリスト教的言語ゲームと日常的言語ゲームでは、意識的/無意識的、能動的/受動的という視点からみて、コミットメントの度合いも異なると考えられる。また、宗教以外の言語ゲームとの関連で言えば、くり返しになるけれども、キリスト教的言語ゲームを成立せしめるコミットメント——たとえば「神」ということばに指示対象(reference)があるとさせるもの——と、自然現象の説明に神の存在を前提とせずに構築される科学的言語ゲームを成立せしめるコミットメントとは、異質なものである。キリスト教的コミットメントはキリスト教に独自なものであるし、無神論の立場にたつ科学的理論へのコミットメントはこれに特有なものである。しかしながら、宗教・芸術・科学などを、ほかのものとは異質なものとさせるという意味では、種々のコミットメントは同一の働きをすと言える。

(c)および(d)にたいする応答は、次のようになる。「神」という概念は、一応非キリスト教信者にも概念的には理解しうる。たとえば「神」概念は、『広辞苑』をひけば「キリスト教において、全知全能で宇宙を創造し支配する唯一絶対の主宰者」と記載されており、非キリスト教信者にも概念的には理解できる。しかし、「神」ということばが実際に指示対象を有するとさせるものは、キリスト教的コミットメントである。この意味において、「宗教言語に対する概念上の理解+ $\alpha$ =信者による理解( $\alpha$ :意味,+ :コミットメント)」という氏の図式化を、「宗教言語に対する概念上の理解+キリスト教的コミットメント=信者による理解」と単純化したい。けれども、氏が(d)で指摘するように、たしかに私はどこまでも2段階に分けた理解をしており、「受け入れる」「重要性を認める」コ

ミットメントを「言語ゲームの内外を別つ指標として」(137)と考えている。これは、氏が指摘するように、ウィトゲンシュタイン哲学の忠実な解釈からは批判されるところだが、彼の立場よりも私の考えが前面に出ていると思っていただきたい。

おわりに

藤原氏の書評論文で疑念をもたれた問題の、ごく一部に対する私見を示したにすぎない。また、本稿によって問題点・矛盾点・曖昧な点などがさらに増大したかも知れない。拙著で論じたことの一部を補足するのみに終わったが、一応これで、藤原聖子氏の書評論文「宗教哲学におけるウィトゲンシュタインの影響と可能性」にたいする応答としたい。氏から提起された諸問題は、じっくり時間をかけて考えたいと思っている。

## 註

- (1) ウィトゲンシュタイン『哲学的探究』(1部23節)。
- (2) 同書,1部 195節。
- (3) 同書,1部 410節。
- (4) K. Nielsen, *An Introduction to the Philosophy of Religion*, The Macmillan Press Ltd., 1982, esp. Chap 4.
- (5) ウィトゲンシュタイン『確実性について』, 411, 414, 246, 248, 162 の各節を参照。
- (6) N. Malcolm, "The Groundlessness of Belief" in: *Thought and Knowledge*, Cornell University Press, 1975.